魯迅選集

第一卷

魯迅選集　第1巻　（全13巻）

1956年6月27日　第1版第1刷発行
1964年2月26日　改訂版第1刷発行　©　¥270.

訳　者　竹内好（たけうち よしみ）

東京都千代田区神田一ツ橋2—3
発行者　岩波雄二郎

東京都 板橋区 板橋町 6—3289
印刷者　白井知一

発行所　東京都千代田区 神田一ツ橋2—3　株式会社 岩波書店

落丁本・乱丁本はお取替いたします　三陽社印刷・松岳社製本

目次

吶喊

自序……七
狂人日記……一四
孔乙己……二八
藥……三四
明日……四五
小さな出来事……五三
髪の話……五六
風波……六二
故郷……七三

阿Q正伝……八六
端午の節季……一三六
白　光……一四六
兎と猫……一五三
あひるの喜劇……一五九
宮芝居……一六三

野　草

題　辞……一七九
秋　夜……一八一
影の告別……一八四
乞食者……一八六
わが失恋……一八八
復　讐……一九〇

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertor

復　讐（その二）……一九二
希　望……一九四
雪……一九六
瓜……一九八
うるわしい物語……二〇一
過　客……二〇三
死　火……二一〇
犬の反駁……二一三
失われたよい地獄……二一四
墓碑銘……二一六
頽れゆく線の顫え……二一七
立　論……二二〇
死　後……二二一
このような戦士……二二六

賢人と馬鹿と奴隷……二二八
臘　葉……二二一
色浅き血痕の中に……二二二
まどろみ……二二四
解　説……二二七

吶喊（とっかん）

（一九一八―二二年）

竹内好訳

自序

私も若いころは、たくさん夢を見たものである。後にはあらかた忘れてしまったが、自分では惜しいとは思わない。思い出というものは、人を楽しませるものではあるが、時には人を寂しがらせないでもない。精神の糸に、過ぎ去った寂寞の時をつながせておいたとて、何になろう。私としてはむしろ、それが完全に忘れられないのが苦しいのである。その忘れられない一部分が、いまとなって『吶喊』となった、というわけである。

私は、かつて四年あまりの間、しょっちゅう――ほとんど毎日、質屋と薬屋に通った。年齢は忘れてしまったが、とにかく薬屋の帳場が私の背丈ほどあり、質屋のそれは背丈の倍ほどあった。私は、背丈の倍ほどある帳場の外から、着物や髪かざりなどをさし出し、さげすみの中で金を受け取り、それから背丈ほどの帳場へ行って、長わずらいの父のために薬を買った。家に帰れば帰るで、また仕事が山ほどあった。かかりつけの医者がごく有名な人だったので、その処方の薬引（補助薬）も変っていたからである。冬の蘆の根、三年霜にあたった甘蔗、元のつがいのままのコーロギ、実のなった平地木（小灌木の一種）……手に入りがたい代物ばかりである。それほどにしても父は、病が日ましに重くなり、とうとう死んでしまった。

かなりの暮らし向きから、急にどん底生活に陥った人があるとすれば、その人はきっとその過程で世間の人々のいつわらぬ姿を見るだろうと私は思う。私がNへ行ってK学堂にはいろうと決心したのも、異る道を行き、異る土地へ逃れて、別種の人々と交りたいと考えたからしい。母は、しょうことなしに、八円の旅

費を工面してくれて、私の好きなようにせよと言った。だが母は、泣いた。これは人情として、当然であった。なぜなら、そのころは経書を学んで官吏の試験を受けるのが、正当なコースであり、洋学を勉強するのは、世間の眼からすると、行き場所のなくなった人間がついに魂を毛唐に売り渡したものと見られていて、それだけよけいにはずかしめられ、いやしめられるからであり、のみならず、母は、自分の息子に会えなくなるからであった。だが私は、そんなことに構っていられずに、とうとうNへ行ってK学堂に入学した。この学校で私ははじめて、世には物理や、数学や、地理や、歴史や、図画や、体操などの学問があることを知った。生理学は習わなかったが、私たちは木版本の『全体新論』や『化学衛生論』などを目にすることができた。私はいまでも覚えている。以前の医者の理窟や処方を、いま知ったこととくらべてみて、次第に私は、漢法医は結局意識的あるいは無意識的な騙りに過ぎない、ということをさとるようになったのである。そして同時に、騙られた病人と、その家族にたいして深い同情を抱くようになった。さらにまた、翻訳された歴史書によって、日本の維新が大半、西洋医学に端を発しているという事実をも知るようになったのである。

これらの幼稚な知識のお蔭で、のちに私の学籍は、日本のある田舎町の医学専門学校に置かれることになった。私の夢はゆたかであった。卒業して国に帰ったら、私の父のように誤られている病人の苦しみを救ってやろう。戦争のときは軍医を志願しよう。そしてかたわら、国民の維新への信仰を促進させよう。そう私は考えていた。私は、微生物学を教える方法がいまどんなに進歩したか、知るべくもないが、ともかくそのころは、幻灯をつかって、微生物の形態を映してみせた。そこで、講義が一くぎりしてまだ時間にならないときなどには、教師は風景やニュースの画片を映して学生に見せ、それで余った時間をうめることもあった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertor

時あたかも日露戦争の際なので、当然、戦争に関する画片が比較的多かった。私はこの教室の中で、いつも同級生たちの拍手と喝采とに調子を合わせなければならなかった。あるとき、私は突然画面の中で、多くの中国人と絶えて久しい面会をした。一人がまん中にしばられており、そのまわりにおおぜい立っている。どれも屈強な体格だが、表情は薄ぼんやりしている。説明によれば、しばられているのはロシア軍のスパイを働いたやつで、見せしめのために日本軍の手で首を斬られようとしているところであり、取りかこんでいるのは、その見せしめのお祭りさわぎを見物に来た連中とのことであった。

この学年がおわらぬうちに、私は東京へ出てしまった。あのことがあって以来、私は、医学など少しも大切なことでない、と考えるようになった。愚弱な国民は、たとい体格がどんなに健全で、どんなに長生きしようとも、せいぜい無意味な見せしめの材料と、その見物人になるだけではないか。病気したり死んだりする人間がたとい多かろうと、そんなことは不幸とまではいえぬのだ。されば、われわれの最初になすべき任務は、彼らの精神を改造するにある。そして、精神の改造に役立つものといえば、当時の私の考えでは、むろん文芸が第一だった。そこで文芸運動を提唱する気になった。東京にいる留学生仲間では、法政や、理化や、さらに警察や、工業を学ぶ連中は多かったが、文学や美術を修めるものはいなかった。それでもどうやら、冷淡な空気のなかで、数人の同志を見つけることはできた。そのほかになお、必要な数人をかり集めて、相談した結果が、ともかく雑誌を出そうということになった。雑誌の題名は「新しい生命」という意味を取ることになり、私たちはそのころ、多く復古的な傾向があったところから、これをつめて単に「新生」と称することにした。

『新生』の出版の期日がせまった。が、まず最初に、

原稿を引き受けていた数人が姿をくらました。つづいて、さらに資本が逃げてしまった。あとには一文なしの三人だけが残された。はじめるときから時勢にそぐわぬ計画だったので、失敗したとて今さら何も言うべきことはない。しかもその後は、この三人さえ、それぞれの運命に駆り立てられて、いっしょに集って未来のよき夢を語りあうこともできなくなった。これが、われわれの生まれざりし『新生』の顚末である。

私が、これまで経験したことのない味気なさを感ずるようになったのは、それ以後のことである。はじめ私は、なぜそうであるかがわからなかった。後になって考えたことは、すべて人の主張は、賛成されれば前進をうながすし、反対されれば奮闘をうながすのである。ところが、見知らぬ人々の間で叫んで相手に一向反応がない場合、賛成でもなければ反対でもない場合、あたかも涯しれぬ荒野に身をおいたように、手をどうしていいかわからぬのである。これは何と悲しいことであろう。そこで私は、自分の感じたものを寂寞と名づけた。

この寂寞は、さらに一日一日成長していって、大きな毒蛇のように、私の魂にまつわって離れなかった。

しかし私は、自分に理由のわからぬ悲しみを抱いていたとはいえ、憤る気持はいささかもなかった。なぜなら、この経験が私を反省させ、自分を見つめさせたからである。つまり私が、臂を振って一呼すれば応ずるもの雲の如しといった英雄ではないということである。

ただ自分自身の寂寞だけは、除かないわけにいかなかった。それは私にとってあまりにも苦痛であったから。そこで私は、種々の方法によって、自分の魂を麻酔させ、自分を国民の中に沈め、自分を古代に返らせようとした。その後も、もっと大きな寂寞、もっと大きな悲しみを、いくつも直接体験したり、傍から眺めたりした。すべて私にとって、思い出すに堪えない、

それらを私の脳といっしょに泥土の中に沈めてしまいたいことばかりである。が、私の麻酔法はきき目があったらしく、青年時代の慷慨悲憤の気持はもう起らなくなった。

S会館（会館は同郷人の寮）には広さ三間の小さな部屋があった。むかし、庭の槐（えんじゅ）の木で女が首をつったと言い伝えられていた。いまでは槐の木は、もう登れぬくらい高くなっているが、その部屋にはまだ住み手はなかった。何年も何年も、私はその部屋を寝ぐらにして、古い碑文を写していた。仮りのすみ家に訪れる客はなし、古碑の中では問題にも主義にもぶつからずにすんだ。しかも私の生命は、このまま暗々のうちに消えてゆくのである。これぞ私の唯一の願いでもあった。夏の夜は、蚊が多い。棕櫚（しゅろ）のウチワを使いながら、槐の木の下に坐って、生い茂った葉のすき間越しにチラチラ見える青空を眺めていると、おそ出の青虫がよく冷りと首筋に落ちてくることがあった。

そのころ、時たま話しにやってくるのは、古い友人の金心異（チンシンイー）であった。手にさげている大型のカバンをぼろ机の上にほうり出し、長衣を脱いで、向かいあって坐る。犬ぎらいだから、まだ心臓をドキドキさせているらしい。

「君はこんなものを写して、何の役に立つのかね？」

ある夜、彼は私のやっている古碑の写本をめくりながら、研究めいた質問を出してきた。

「何の役にも立たんさ」

「じゃ、君は何のつもりで写すんだ？」

「何のつもりもない」

「どうだい、君は何か文章でも書いて……」

私には、彼の言う意味がわかった。彼らは『新青年』という雑誌を出している。ところが、そのころはまだ誰も賛成してくれないし、といって反対するものもないようであった。彼らは寂寞におちいったのではない

か、と私は思った。だが、言ってやった。
「かりにだね、鉄の部屋があるとするよ。窓は一つもないし、こわすことも絶対にできんのだ。なかには熟睡している人間がおおぜいいる。まもなく窒息して、みんな死んでしまうだろう。だが、昏睡状態からそのまま死へ移行するのだから、死ぬ前の悲しみは感じないんだ。いま君が、大声を出して、やや意識のはっきりしている数人のものを起したとすると、この不幸な少数のものに、どうせ助かりっこない臨終の苦しみを与えることになるが、それでも君は彼らに落まぬと思わぬかね」
「しかし、数人が起きたとすれば、その鉄の部屋をこわす希望が、絶対にないとは言えんじゃないか」
そうだ。私はむろん、私なりの確信はもっているが、しかし希望ということになれば、これは抹殺はできない。なぜなら、希望は将来にあるものであるから、絶対にないという私の証明をもってして、有りうるという彼の説を論破することは不可能だからだ。そこで結局、私は文章を書くことを承諾した。これがすなわち、最初の「狂人日記」という一篇である。その後は、踏み出した以上はもどるわけにいかず、友人たちの依頼があるたびに小説めいた文章を書いて、お茶をにごして来たのが、積り積って十数篇になった。
思うに私自身は、今ではもう、切なさが突きあげてきて声になるといった人間ではなくなっている。だが、あのころの自分の寂寞の悲しみが忘れられないせいでもあろうか、時として思わず吶喊が口から出ることがあるが、せめてそれによって、寂寞のただ中を突進する猛士に、彼が安んじて先頭をかけられるよう、慰めの幾分でも与えられたらと思う。私の吶喊の声が、勇ましいか悲しいか、憎々しいかおかしいか、そんなことは顧みるいとまはないのだ。ただ、吶喊であるからは、主将の命令はきかないわけにいかなかった。そこで私は、往々にして勝手な曲筆を弄し、「薬」の瑜児の

墓にはいわれのない花輪を添えたし、「明日」でも、単四嫂子がついに息子に会う夢を見なかった、とは書かなかったのである。これは当時の主将が、消極をきらったためであるが、また私自身としても、それで自分が苦しんできた寂寞を、私の若いころとおなじように甘い夢を見ている青年に伝染させたくなかったのである。

こうして見ると、私の小説が芸術からはるかに遠いことは、申すまでもないことである。しかるに今日、依然として小説の称を受けているばかりでなく、一本にまとめる機会さえ与えられるに至っては、何はともあれまことに僥倖といわざるをえない。僥倖の点では、私は心もとなさを感じはするが、またひるがえって、しばらくなりとこの世に読者がつづくことを思えば、さすがに嬉しくないことはない。

されば私は、ここに自分の短篇小説を集めて印刷に付し、ついては以上に述べた因縁によって、これを『吶喊』と名づけたのである。

一九二二年十二月三日、北京において

魯迅しるす

狂人日記

某といえるもの兄弟、いまその名を秘すも、みな余が往時、中学校にありし時代の良友なり。隔て住むこと多年、音信ようやく稀なりし。さきごろ、たまたまその一人の大病せし由をきく。あたかも故郷に帰るに際し、道を迂回して訪れつるに、一人にのみ会えりしが、病みしは弟なりという。遠路の見舞いかたじけなし、されど当人は病すでにいえて、某地に候補となりて赴任せり、かく言いもて大いに笑い、日記帳二冊を取り出して余に示して曰く、これを見給え、当時の病状を知り給わん、旧友に献ずるは差支えなし、と。持ち帰りて一読するに、けだしその病の「被害妄想狂」の類なりしことを知る。語るところきわめて錯雑し、順序次第なく、荒唐の言また多し。月日は記さざれど、墨色と字体の一様ならざるにより、その一時に成りしにあらざるや必せり。間にやや脈絡を具うる箇所あり、いまこれを抜粋して一篇となし、医家の研究材料に供せんとす。日記中に語の誤りあれど、一字も訂正せず。ただ人名のみは、すべて村人にして世の有名人ならず、憚るところなしといえども、すべてこれを改めたり。さらに書名は、もと本人の全快後に題せしものなれば、あえて改むることなし。民国七年四月二日しるす。

一

今夜は、月がいい。

おれはあれを見なくなってから、三十年以上たつ。今日は見たから、気分がじつにいい。してみると、これまでの三十年以上は、まったく正気でなかったわけだ。だが十分用心しなきゃならん。でないと、あの趙家の犬がなぜおれをじろじろ見るのか。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertor